

地域参画による公園づくりのためのワークショップの見直し ～議論中心から活動中心のスタイル転換～

田中 公子¹・寺内 雅晃²

¹近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所 調査設計課 (〒634-0144奈良県高市郡明日香村大字平田538)

²近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所 調査設計課 (〒634-0144奈良県高市郡明日香村大字平田538) .

キトラ古墳周辺地区の設計、管理の各段階において、市民参画を得ながら事業を効果的に推進していくためのワークショップを、議論中心から活動中心のスタイル転換をおこなったことを報告するものとする。

キーワード 地域参画, イベント, ワークショップ, コミュニケーション

1. はじめに

(1)キトラ古墳周辺地区整備の位置づけ

国営飛鳥歴史公園は、「日本人のこころのふるさと」をテーマとして、昭和45年の閣議決定により整備が決定し、現在、祝戸・石舞台・甘樫丘・高松塚周辺の4地区を概成開園しており、年間約80万人の来園者に訪問いただいている。また、昭和58年に国宝級壁画が発見されたキトラ古墳周辺の一体的な保全活用のため、平成13年の閣議決定「飛鳥地方における歴史的風土及び文化財の保存等に関する方策の一環としての都市公園の整備について」により、キトラ古墳周辺地区（以下、キトラ地区）を国営飛鳥歴史公園の第5番目の新規地区として整備することが決定しており、開園後は、本格的な歴史体験イベントや米づくり・野菜づくり等の農体験を、新たな公園サービスとして提供を予定している。

(2)地域参画型パークマネジメントについて

現在、平成28年度の開園を目標に整備を進めているところであるが、多くの来園者や地元村民に愛されるキトラ地区とするためには、いったいどのような公園づくりを進めていくべきか。このテーマの実現に向けてキトラ地区では、植物管理や施設管理等の基本的な管理は行政等の公園管理者が担いながらも、地元村民や農家、観光団体、ボランティア、教育機関等多様な主体が公園づくりに関わることにより、古都飛鳥の歴史・風土にねざし

た体験型イベントや、そのイベント実施に必要となる施設を、共に創り上げていく地域参画型のパークマネジメント手法の導入に取り組んでいるところである。



(3) これまでのキトラ地区における地域参画の取り組み

公園事務所の取り組みとしては、平成22年度から開園後のイベントプログラムの実施を想定した試行的取り組みを行ってきた。具体的には、明日香村が主催している明日香まるごと体験ウォーク（村内を周遊する企画）のコース上で、キトラ地区の近隣村民や明日香村内で活動する団体と連携し、地区内の4カ所で体験イベントを実施してきた。

また、公園整備の計画・設計に反映するため、前述の多様な主体から、公園づくりへの期待や要望を把握することを目的としてワークショップ（以下、WS と記載）も平成22～23年の2年間で5回開催してきた。

表-1 WS 構成

WSの構成
地元総代、えいのうキトラ、飛鳥里山クラブ、公園管理センター、飛鳥京観光協会、明日香村地域振興公社、大化塾、阪南大学、明日香村伝承芸能保存会、みのり会、明日香村、古都飛鳥保存財団



第1回WSのようす

(2) ①こちらから地元に飛び込んでいく！

これまでの、参加者にWSに「集って」もらい、公園事業を進める議論だけを考えた企画であったが、それだけでは、WSメンバーとの距離は縮まらない。そのため、WSの場以外に、個別ヒアリングを密に行い、相手のニーズ（地元が抱える課題・キトラ地区に期待していること）をより詳細に聞き取り、どのような活動内容であれば、キトラ地区が目指す参画型パークマネジメントとWS参加者の意識がブリッジできるかを探った。

表-2 ヒアリング概要

ヒアリング対象	WSメンバー、WSメンバーに推薦していただいた方
ヒアリング時期と回数	第1回WS開催前11団体 第1回WS開催後24団体 第2回WS開催後4団体
ヒアリング項目	- 各活動団体等の活動活動内容の現状について - 会議の進め方について課題や要望 - WS開催後フォロー（説明）と会議で言えなかったこと、個別の思いなどの把握 - キトラ古墳周辺で実施したい活動やイベントについて - 推薦したい地域の活動団体等の人材
とりまとめ結果	明日香村に関する情報整理
	「イベント企画」に関する情報整理
	「農」に関する情報整理

2. 参画型活動を立て直すための取り組み

(1) WSの進め方そのものの転換の必要性

平成24年度からは、より具体的な議論が進むよう、イベント企画と農体験ごとにテーブルを分けたWSの運営を企画し、第1回WS（平成24年8月）では、過年度までのふりかえりに加え、今後の具体的な活動メニューを絞り込み・整理するための内容とした。

しかし、全体討議では、「議論が全く前に進んでいない。」「過年度の繰り返しばかり。」「具体的に動いていない。」という厳しいご意見が数多く上がり、参画型パークマネジメントにはほど遠い状態であった。実は、活動そのものが停滞していることが明らかとなり、年数回の机上のWSだけでは活動を進めていく上で限界があり、WSの進め方そのものの転換の必要性に迫られた。

そこで、公園事務所としては、活動の立て直し、WS参加者の信頼関係を取り戻すこと、これまでのやり方そのものの見直しを図るため、以下4つの具体方針を整理した。

①参加者との距離感：待つのではなく、こちらから地元に飛び込んでいく！

②農：公園が抱える課題と地元が抱える課題の共通項を見いだす！

③イベント企画：地域から出たアイデアこそが重要なであり、とにかくやってみる！

④WSの場づくり：「議論」の場でなく、具体活動の「報告」の場・次へのモチベーションの「確認」の場とする！

(3) ②農：公園が抱える課題と地元が抱える課題の共通項を見いだす！

過年度より、キトラ地区の開園後に提供する農体験については、農業そのものが特殊な管理内容であるため、マンパワー・資金・農作業の技術・工事中の場所の確保などの多くの課題を抱えながら活動を進める必要があり、特に、地元農家から農業技術を学ぶことが喫緊の課題であった。そのような中、先に整理した地元農家からのヒアリングでは、明日香村においても、人手不足（後継者不足）・耕作放棄地といった全国的な課題に直面していることが明らかとなった。

時間をかけたヒアリングにより、農作業の技術を学びたい公園側と、農の継承が困難になっている地元農家とを結ぶ共通項が徐々に見え始めてきた。そこで、この活動を通じた地元農家への貢献の意味も含め、全国で耕作放棄地等の農の課題解決に取り組んでおり、農林水産省の政策審議委員でもある西辻一真氏を講師に招き、農体験チームの活動の一環としての勉強会を開催した。

表-3 勉強会概要

参加者	地元総大、えいのうキトラ、飛鳥里山クラブ 公園管理センター、共同組合飛鳥観光振興、飛鳥京観光協会、明日香村地域振興公社、大化塾、阪南大学、明日香村伝承芸能保存会
講演の概要	・農作物をつくる楽しみや苦しみを共有・体験することを一番の目的としている。 ・農業は、次世代に伝えるべき重要な生業である。 ・耕作放棄地はその場所の生活そのものを放棄することにつながる。
討議結果	・飛鳥地域の農業についての作法ややり方を学べる「道場」のようなものが必要。 ・地域の方が講師になることで収益になる。 ・生徒は担い手と販売先の顧客の双方になる可能性がある。 ・2年目以降は地域の農家に入って学ぶことで手助けにもなる。



農の勉強会

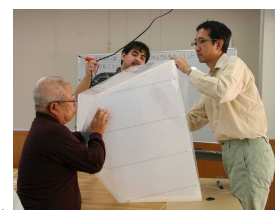
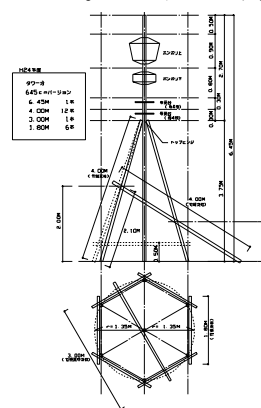
(4) ③イベント企画：地域から出たアイデアこそが重要なのであり、とにかくやってみる！

開園後提供する歴史体験イベントについては、冒頭述べた通り、村のイベント開催時に合わせた試行的な取り組みを行っていたものの、あくまで、村内の活動団体への単発的な依頼によるイベント開催であった。一方、ヒアリングから得られた情報の中には、明日香ならではの土地柄やアイデアを生かした意見が数多くあり、WS 参

加者からもこれまでとは異なる飛鳥らしいイベント企画が期待されていた。そのため、地域から提案されたアイデアを飛鳥スカイツリー企画と銘打ち、WS のメンバーである阪南大学吉兼教授や地元の村づくり団体である大化塾、公園ボランティアの飛鳥里山クラブと協同で制作・イベント開催を行った。

参画型パークマネジメントで最も重要なことは、参画する者自らが提案した内容を、多様な主体の役割分担をしながら、その「楽しさ」を共有し、次の活動への展開を継続していくことである。そのため、飛鳥スカイツリー企画のねらいとしては、1つのイベントを開催するために、企画から準備、イベント開催までを一連で行い、参加者を募集しながら、協働でイベントを行うことで、その楽しさや、実際に公園のイベントとして実施していく上での課題を共有することを大切にしたい。

- ・平成24年10月26日、作戦会議として、部品制作を実施。参加者16名。



ぼんぼり部製作



布部製作

図-2飛鳥スカイツリー設計図

- ・平成24年11月3日、立て込みとして、公園内で木を切り出し、3基の立て込みを行う。参加者は25名（地元の方、阪南大学の学生などWS以外も参加）

① 切り出しと運搬



ぼんぼり部固定



② 支柱連結



布固定



③ 建て込み



集合写真



- ・一連の作業を組み込んだことで、参加した地域住民、から、参加して良かったという意見が多くあった。
- ・参加していない地域住民の方々からも興味をもってもらうことができた。
- ・吉兼教授のゼミ生が観光学習ということで飛鳥スカイツリーの製作建て込みに参加したが、明るい学生の参加で製作活動の場がにぎやかでいっそう楽しい雰囲気になった。
- ・議論ばかりのWSから地域の方と一緒に汗をかく活動を行うことによって、地域の方と距離が縮まった。



飛鳥人と記念撮影

会場パネル・事業紹介パネル

(5) ④WS の場づくり：「議論」の場でなく、具体活動の「報告」の場・次へのモチベーションの「確認」の場とする！

【第2回WS〔平成25年1月24日〕】

参加者から厳しいご意見をいただいた第1回WSから半年あまり、停滞しかけた活動を何とか立て直すため、公園事務所としては、「きめ細やかなヒアリングの実施」、「公園と地元が抱える共通課題を模索する農の勉強会」、「ともに汗をかく製作・建て込み・イベント開催を行った飛鳥スカイツリー」に取り組んできた。

過年度までは、具体的な活動のない中での議論中心のWSであったが、第2回WSは、地元とともに取り組んできた半年間の活動報告を中心に行うと共に、率直に、この半年間の活動に対する感想をWS参加者に問うことと

した。その結果、今回は、第1回WSでの厳しい意見に対する点が解消され、具体的に前に進んでいるという印象を感じていることを、多くの参加者からご意見をいただくことができた。さらに、今後の取り組みに対する参加意向も非常に高く、飛鳥スカイツリーや農の勉強会の取り組み通をして、公園事務所とWS参加者それぞれが、活動に対する「楽しさ」・「やりがり」・「信頼関係」・「今後の課題」の共有を深められた効果であると考えている。

なお、WSでは、活動に参加した者も参加していない者も含めて、「楽しさ」を共有する手法として、飛鳥スカイツリーの製作映像を作成・上映したところ、活動プログラムを「楽しさ」を直に伝えることにも成功した。



ニュースレター

【第3回WS〔平成25年3月21日〕】

年度最後に、1年間のふりかえりと、これまでの進め方の共通認識を高めるとともに、今後の参画型活動のイメージを参加者全員で共有するため、第3回WSを開催した。

いわゆる参画型の活動を成功に導くために最も難しい課題として、「活動の継続性」が上げられる。他の国営公園や地方公共団体の公園においても、積極的に参画型公園づくりの取り組みが行われているが、この活動の継続を確保する上で、多くの公園がつまづいており、WS最終回では、「歩きながらのおしゃべり現地見学会」や「お茶を飲みながらの活動イメージづくり」を企画に盛り込むことで、メンバー間のコミュニケーションや、次年度に向けた参加意識を高めることに絞った内容とした。

WSの終わりには、1年間をふりかえりWSメンバーから1人ずつ感想をいただいた。

「過年度のWSの参加は義務感があり、正直、重たい気持ちで参加しており楽しくなかったが、今年の活動は、参加するのが楽しみであった。」、「スカイツリーが楽しかった。今後も、是非何らかのかかわりができればと思う。」、「具体的な展開がまだわからないが、農体験もできる範囲で協力していきたい。」「現地を見て、イメージが膨らんだ。きっと素敵な公園になると思う。」などの前向きな意見を寄せていただき、公園事務所としては、参画型パークマネジメントの実現に向けた手応えを感じることができた。



茶話会と意見交換会の様子



現地見学会の様子

いる（例：活動を広げる広報の工夫、地元農家のお手伝い企画を通した農作業技術の習得）

キトラ地区の参画型パークマネージメントの実現に向け、これまでの取り組みが芽吹き始めている。特に、農体験は、平成25年度から地域の農作業のお手伝い企画を立ち上げ、6月には「まめからはじまるコミュニティーづくり」と銘打った体験イベントを地元農家の協力を得て実施し始めている。本活動が、本格的に軌道に乗るよう公園事務所としても全力で取り組んでまいる所存である。

4. まとめと今後の課題

以上見てきたように、平成24年度は、過年度までのお叱りから始まり、停滞しかけた活動の立て直しに全力を傾ける1年間であったといえる。これまで計画してきたことのうち、参画型パークマネージメントの導入を最終ゴールに位置づけながらも、参加者との信頼関係を再構築するため、「農の勉強会」「飛鳥スカイツリー製作」など「できること」から着実に実行に移していったことが功を奏した一つの要因であると考えている。

先に述べたとおり、多くの公園では、参画型の仕組みづくりのため、様々な手法による取り組みが現在も進められているところであるものの、様々な実情により、当初掲げた目標を達成している公園は必ずしも多くはない。キトラ地区についても、ようやく参画型パークマネージメントの仕組み作りの端緒にたどり着いたところであるが、開園まで残すところ3年弱であり、あまり時間も残されているわけではない中、以下に今後の展開の課題を整理した。

●「哲学」を継承していくための仕組みづくり

キトラ地区の参画型公園づくりの継続性を確保するために最も重要なことは、平成24年度中に、公園事務所も含めたWS参加者全員が共有した活動の意義・楽しさ・手応えを、開園後も含めて「哲学（活動ルール）」として継承していくことである。国営公園事業については、事務局担当者の異動、コンサルタント選定などの理由により、必ずしも、現行体制で活動を継続できるわけではない。そのため、どのような体制になったとしても、参画型パークマネージメントの哲学（活動ルール）を共有できる仕組みを検討している。

（例：懇談会の立ち上げ、最低限の活動ルールが網羅されたコンセプトブックなど）

●活動参加者及び内容の裾野を広げる取り組み

イベントプログラムや農体験を想定した場合、現行の体制では、その担い手は十分とはいえない状況である。今後は村外からの参加者も募り体制をつくりあげていくことが必要であるとともに、特に、農体験については将来的な農地管理を見据えた地元農家の協力のあり方や地元「農の作法」を継承していく取り組みが求められて



6月16日黒豆種植えチラシ



WSメンバーが作成した古代住居の模型